

雪下のマダマ  
伯爵夫人の自叙伝

マリー・ダグー  
著  
近藤 朱蔵  
訳

青山ライフ出版

MÉMOIRES, SOUVENIRS ET JOURNAUX DE LA COMTESSE D'AGOULT

Présentation et notes de Charles F. DUPÊCHEZ

©Editions Mercure de France, 2007

This book is published in Japan by arrangement with MERCURE DE FRANCE,  
through le Bureau des Copyrights Français, Tokyo.

## 訳者まえがき

本書は *Mémoires, souvenirs et journaux de la comtesse d'Agout, (Daniel Stern), présentation et notes par Charles F. Dupéchez, nouvelle édition augmentée, revue et corrigée, Mercure de France, 2007* を底本とし、その九頁～四四六頁の本文とその部分に付された巻末の注釈を訳したものである。ただし二八五頁から始まる「第一巻への付録」の一部は割愛した。底本の前身は二巻からなる単行本 (*Mémoires, souvenirs et journaux de la comtesse d'Agout, Daniel Stern, I, II, Mercure de France, 1990*) だったので、「第一巻への付録」と相変わらぬ称されているわけである。底本のテキストに疑問が生じた場合、この旧版と Kindle 版 *Mes Souvenirs* も参考にした。なお、底本後半の Annexes (四四七頁～七二二頁とその注釈) と *notice biographique* (七～八頁) は二〇一八年、拙訳『巡礼の年 リストと旅した伯爵夫人の日記』として、二〇一八年に青山ライフ出版から刊行されているので、本書と合わせてほぼ原著は完訳できたことになる。

注釈について：マリー・ダグー自身がつけた注は\*が付されている。原著のデュペシェ氏による注は(1)、(2)などと番号が付されている。訳者がつけた注は「訳注」とことわってあるが、デュペシェ氏の注にさらに注を加えた場合(a)、(b)などという記号を付した。

しばしば補足資料として引用したのは『ダグー伯爵夫人往復書簡全集』と『フランツ・リスト＝マリー・ダグー往復書簡集』である。前者は Marie de Fravigny, comtesse d'Agout, *Correspondance générale*, Honoré Champion, 2003 年、二〇一二年一月現在、第一二巻(一八六一年)まで刊行されている。後者は Franz Liszt, Marie d'Agout, *Correspondance, nouvelle édition revue, augmentée et annotée par Serge Gut et Jacqueline Bellas, Fayard, 2001* 年、

五六二通の書簡が収められている。

目次に簡単な要約がついているが、底本では各章の冒頭に置かれていたものを読書の便を考えて目次に移したものである。ただし、（ ）がついているものは訳者によるものである。

#### 底本編者による注記

星印のついた、頁の下の注は原著にあったものである。原著（死後出版なので著者が読み返すことは決してなかったということをお願いしておこう）でイタリック体で表されている語は正確に再録した。常に印刷上の厳格さに従ったというわけではなく、私たちの考えでは、ダグー伯爵夫人が原稿で下線を引いた語をイタリックにしたのだろう。一方、原稿を基にしたテキストでイタリックにしたのは、ダグー伯爵夫人が下線を引いた語、外国語由来の語と作品の題名、新聞名である。大括弧「」に語や句が入っている場合は読解に必用な補足である。

#### 訳者の注記

底本でイタリック体になっているものは「」をつけた。「」は「」のままである。

# 目次

訳者まえがき ..... 1

序文 ..... 11

## 第一部 若き日々（一八〇六—一八二七）

15

I ..... 16

私の父 父方の先祖 『フ・ピブル・ギヨード・プロヴァン』 『慰謝』<sup>コンツレション</sup>の作者 グラシアン・ド・フラヴィニー子  
爵フランスに於ける脱走と脱走兵に対する刑罰に関する考察 ソルボンヌの博士 パルムの大使館  
九三年の断頭台 フキエータンヴィル・フラヴィニー家の女 レ・ヴィユー前伯爵夫人

II ..... 27

ベートマン家 父の勾留と結婚 フランスへの帰国 私の姉 私の兄たち 私の誕生  
「真夜中の子供たち」<sup>デモモン</sup> 導きの霊 幸せな幼年時代 トウレーヌとモルチエ城

III ..... 38

田園の楽しみ 動物たちに親しんだこと 鳥小屋 アンゴラ兎 猪の子 庭師のロバ 「ジエネルーズ」  
「地下道」 毛虫と蘭 早くから変容という考え方になじんだこと 落ち穂拾いと「アルボタージュ」  
ドイツ料理 アーデルハイト マリアンヌ 私の庭 最初のドイツ式兼フランス式教育 馬車の旅  
私の「ミネルヴァ」 ブルボン家の帰還 百日天下 フランクフルトとヴァンデへの出発

IV ..... 49

ベートマン家 「老婦人」 伯父さん 「バーズレルホフ」と「フォーゲルシュトラウス」 スタール夫人登場  
祖母の編み物 ホルヴェック伯母さん トルヴァルセンの浅浮き彫り 私はカトリックなのか？

V ..... 63

エンゲルマン寄宿学校 従姉妹のカタウ 色男たち 深紅色の「長衣」<sup>シマル</sup> ゲーテの祝福

VI ..... 69

モルチエに帰る ヴアンデ派 超王党派<sup>ウルトラ</sup> ラ・トレムイユ公 狩り 「ミロール」と「フィガロ」  
ザリガニ捕り 野生の雌犬 小さな行商人 完璧な友情

VII ..... 81

初聖体拝領 父方の祖母 ラトゥールのパステル画 「モロンが退屈させる」  
私の洗礼の有効性に関する疑い ルジヨ神父

VIII ..... 88

独仏の教育 ダンスの師匠アブラム氏 フェンシングの師匠ドナディユー嬢 ゴルチエ神父の学校  
フアン・セバスチアーニ、ヘンリエット・メンデルスゾーン プララン公爵夫人の死 フォーゲル先生  
ドイツの音楽

IX ..... 104

こつそり本を読む 私の仲間エステルとアドリエヌ 愛の秘密 私の兄  
私の庭は理想主義、兄の庭は現実主義 フィエヴェ氏 テオドール・ルクレルク氏 喜劇 死

X ..... 120

フランクフルトと「帝国議会の宴 シャトーブリアン氏 ユダヤ人に対するフランクフルト人の偏見  
「ゲット」 「アムシェル・ロートシルト」の訪問 「老婦人」の怒り

XI ..... 133

ピロン館 サクレールクール修道院 ヴァラン神父 ウジェニー・ド・グラモン様 アントニア様

XII ..... 143

私の信心 マリアの子供たち ファニー・ド・ラ・ロシュフーコー アデリーズ・ド・X \* \* \*  
アントニア様の花束 学問賞と徳行賞 談話室 外出 トレムイユ妃 私の姉オーギュスト  
レオン 修道院との別れ

XIII ..... 161

私は十六歳 母と私の対立 血の法則 私の信心 コエサン氏とその一派 ガール神父と「愛の井戸」  
私の小説は消えてしまった

XIV ..... 172

フランス式結婚 .....

XV ..... 180

結婚相手としての私の価値 結婚申し込み 真実の愛 ラガルド伯爵  
たった一言が運命を変えることができる

XVI ..... 190

私の悲しみ どのように私の気を晴らそうとしてくれたか イタリアの麦わら帽  
ブローローニユの森今昔 イギリスの小説 ローマのモザイク

XVII 私の結婚 ..... 196

## 第二部 社交界—宮廷とサロン—流行(二八二七—一八四九) 201

前書き(一八六七年に書かれた) ..... 203

I サン||ジェルマン街の社会 ..... 205

II ..... 210

ブルボン家の王族 ルイ一八世 シャルル一〇世 宮中での拝謁 王太子妃 王家の内輪の夜会

ベリー公爵夫妻 パレ||ロワイヤル シャルトル公爵とワレウスキ伯爵

III ..... 230

老寡婦たち ラ・トレムイユ大公夫人 モンカルム侯爵夫人 モンモランシー家

サン||ジェルマン街での若い娘たちの舞踏会

IV ..... 240



	文学サロンと音楽サロン	ロッシーニ	マリブラン夫人	ゾンターク嬢	ソフィー・ゲー夫人
	デルファイーナ・ゲー夫人	エミール・ド・ジラルダン氏			
V	.....	.....	.....	.....	.....
	近づく革命	『ウィリアム・テル』初演	ケーラ伯爵夫人	ポリニャック公	
VI	.....	.....	.....	.....	.....
	マイー館	七月革命の日々	「むかしむかし王様とお后様がいらつしやいました。」		
VII	.....	.....	.....	.....	.....
	サン  ジェルマン街のふくれつ面	ロザン公爵夫人のサロン	ブドロ街のサッフオーとマラケ河岸通りのコ		
	リーヌ	クロワシー城	喜劇	演奏会	アルフレッド・ド・ヴィニーの朗読会
	サロンという野望	サロンの大物			
VIII	.....	.....	.....	.....	.....
	教会の母たちと小母さんたち	ベルジョイオーゾの奥方、レカミエ夫人とアベイ  オー  ボワ	ブリフォー氏		
	民主政体における女性とサロン				
	第一巻への付録	.....	.....	.....	.....
E	ルノルマン嬢(1)訪問記	.....	.....	.....	.....
F	.....	.....	.....	.....	.....
	(ゲーテとテモーニッシュなもの、古代のダイモン)				

III	.....	330
II	.....	323
I	.....	317
序文	.....	315
<b>第三部 情熱(一八三三〜一八三九)</b>		313
第二卷への序文	.....	307
(ゲーテの彫像を再び見て〜ソネット)		
K	.....	305
モーリスド・フラヴィニーの手紙 (ストラスブールより)		
I	.....	304
モーリスド・フラヴィニーの手紙 (ロンドンより)		
H	.....	301
(ラ・トレムイユ公の怠惰な狩について)		
G	.....	301

IV ..... 334

V ..... 341

VI ..... 344

VII ..... 349

**第四部 不確かな年月 文人生活（一八四〇—一八四七）**

363

前書き ..... 364

I ..... 365

パリへの帰還 躊躇 提案と忠告 ラムネー神父 サンド夫人 エミール・ド・ジランダン氏

私の最初の文学的試み 『ネリダ』 ベランジェ

II 薔薇館そうびかん ..... 398

**第五部 私の精神と本** 409

**第六部 私の敬意と好奇心** 415

最後の思索 ..... 417

前書き(1) ..... 417

索引								
	マリー・ダグー年譜	参考文献	訳者あとがき	解説 シャルル・F・デュペシエ	IV	III	II	I
	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
	455	452	438	427	425	424	421	418